対人感情と対人行動と情緒の関連¹

立正大学 齊 藤 勇²

Interpersonal sentiments, social behaviors and emotions

Isamu Saito (*Department of Psychology, Faculty of Liberal Arts,
Rissho University, Shinagawa-ku, Tokyo 141*)

Sixty individuals (30 male/30 female) served as subjects in an experiment designed to investigate a person's felt emotions while engaged in social interactions with other people. The social interaction situations explored here represented various combinations of the following three variables: (1) eight kinds of sentiments about the other person; (2) eight kinds of social behavior directed to the other person; (3) sex of the other person. Subjects' responses to questioning revealed that a person's emotional reaction is heavily dependent upon the interpersonal sentiments pertaining in a given situation. Very different emotional reactions were associated with differences in interpersonal sentiments even when the pattern of social behavior remained constant. It was also found that emotional reactions changed when different patterns of social behavior were employed with a given individual.

Key words: interpersonal sentiments, emotions, liking, dislike, social interactions, interpersonal behaviors, attraction.

人が他者と相互作用する場合、初対面等特別の場合を除いては相手の人に、たとえば好意とか嫌悪といった感情傾向をもっている。人はこの対人感情をベースに相手の人との相互作用を行っている。この対人間の相互作用は、互いに相手の人から行動をうけ、また相手の人に行動を行うという2人の間の行動のやりとりである。このような行動の交換は各々の個人内において相手の行動の認知、評価、そこから生じる情緒、相手への欲求などの心理的プロセスを生じる。対人関係の研究はこの対人行動と心理のプロセスを究明することにある。ここでは相手の人への感情傾向を基礎に、相手の人への行動とその時感じる情緒との関連をみていくことにする。

対人間の相互作用における情緒の生起について検討すると、2つの生起状況が考えられる。まず相手の人からある行動を受けたとき、人はなんらかの情緒を感じるであろう。また自分が相手の人にある行動をするとき、なんらかの情緒をもって行うであろう。このように本稿では対人間の行動を、相手からある対人行動を受ける場合と、相手に対してある対人行動を行う場合の2つの過程に分けて考え、各過程と情緒との関連を検討している。ところで前者の相手からある対人行動を受けた場合の情緒については既に齊藤(1985)によって検討されている。本論文は後者、つまり相互作用において相手にある

対人行動を行う場合、人が感じる情緒について実証的データを集収し検討していくことを目的とする。本研究の基本的考え方は齊藤(1985)に示してあるように McDougall (1908), Heider (1958), Arnold (1960), Schachter (1964), それに Kemper (1978) らの考えに基づいている。

方 法

質問紙調査法により上記目的の実証的データを得るため、以下のような質問紙調査表を作成し、調査を実施した。調査表作成過程については齊藤(1985)に記載してある。

1. 調査表 作成した質問紙調査表は次の通りである。

a) 設問: 調査表の設問は次の通りである。“ある人が1-8のように思っている同性あるいは異性の相手の人に以下のような行動をするとき、その人はふつうどのような感情や情緒をもちながらその行動を行い、またその行動が終わった後でどのような感情をもちやすいか。各感情について、そのような感情をもつ場合…○, もたない場合…□を各欄に記入し、全マス目をうめて下さい。”ここでの1-8とは対人感情項目である。

b) 対人感情項目: 対人感情項目は次の8項目である。調査表の8つの対人感情項目欄には()内のような説明が書かれている。

1. 好意の感情傾向 (好意をもっている人)
2. 慈愛の感情傾向 (かわいい, いじらしいと思っている人)

¹ 本研究の一部は日本心理学会第49回大会において発表した。

² 本論文の作成にあたり小林美恵子氏(立正大学)に甚大な御協力を載いた。氏に心から感謝します。

3. 優越の感情傾向（自分の方が優位・相手が下の人）
4. 軽蔑の感情傾向（蔑視、見下げている人）
5. 嫌悪の感情傾向（嫌悪感をもっている人）
6. 恐怖の感情傾向（恐ろしいと思っている人）
7. 劣等の感情傾向（自分の方が劣位・相手が上の人）
8. 尊敬の感情傾向（尊敬している人）

c) 対人行動項目：対人行動項目は次の8項目である。

1. 友好的行動, 2. 依存的行動, 3. 服従的行動, 4. 回避的行動, 5. 拒否的行動, 6. 攻撃的行動, 7. 支配的行動, 8. 援助的行動。

d) 情緒項目：情緒項目は齊藤（1985）と同一の38項目である。

e) 行動の前後項目：上記の対人行動を行うときとその行動を終えた後の感情を各々別個に調べるために、回答欄の各対人行動項目の下に、対人行動を行うときと終了後の2つの欄が設けられている。

f) 性別項目：対人行動を行うとき、相手の性別により感じる情緒は異なると考えられる。このため各回答欄は相手の人の性別として、同性の場合と異性の場合の2つの欄が設定されている。

2. 調査の手続きとデータの整理 a) 被験者：大学生60名（男子30名、女子30名）。

b) 調査手続き：1983年12月、教室において調査表を配布し、時間内（1時間）に回答を終えた者はその場で回収し、回答し終えない者は1週間後に回収した。

c) データの整理：マトリックスは対人感情項目8、対人行動項目8、行動の前後項目2、情緒項目38、性別項目2で、 $8 \times 8 \times 2 \times 38 \times 2$ となり、全セル数は9728である。各セルの回答を被調査者の男・女別に○□の数を数え、19456の比率を算出した。これが基礎データである。ここでは紙面の関係上、対人感情のなかでも最も重要な感情傾向である好意の感情傾向と嫌悪の感情傾向の2項目について相手に対人行動を行うときの対人行動と情緒の関連についてみていくことにする。

d) 結果の表現：“結果と考察”における各状況での“情緒を感じる”と回答した人の比率の表現はおおよそ次の基準に従っている。“ほとんどの人は…である”という表現は各セルの生起比率の差の検定において、1%レベルで有意の76.67%以上の場合である（ $\chi^2=8.533$, $df=1$ ）。“多くの人は…である”は50%以上の場合、“…の人も少なくない”は35—49%の場合である。

結果と考察

1. 対人行動別にみた情緒の生起

対人場面において相手の人にある行動を行う場合、人はどのような情緒をもつてあろうか。対人相互作用場面で感じると思われる情緒について、上記の調査結果をもとに、その人にもっている好意と嫌悪の感情傾向別、対

人行動別に整理した。これをもとに対人関係において、相手にある一定の対人行動を行うとき、人が感じる情緒を順次みていくことにする。対人感情と対人行動との関係から生起する主要情緒（Ekman, 1982）についてはTable 1に示してある。

(1) 友好的行動を行うときの情緒：好意をもっている人に友好的行動を行う場合、ほとんどの人が好感、なじみ、喜び、うれしさを感じている。また男女とも異性に友好的行動を行う場合、愛情を感じる人が多い。男子は女子に友好的行動を行うとき、その相手の人をかわいいと思う気持（男女間 $\chi^2=14.70$, $df=1$, $p<.01$ ）と自らが恥ずかしいという気持（男女間 $\chi^2=4.59$, $df=1$, $p<.05$ ）をもちやすい。逆に女子が男子に友好的行動を行うときは甘えを感じている人が多い（男女間 $\chi^2=4.44$, $df=1$, $p<.05$ ）。

一方、嫌いな人に友好的行動を行う場合、男女とも多くの人が嫌悪感やイライラ、けむたさ、不満などを感じている。

(2) 依存的行動を行うときの情緒：好意をもっている人に依存的行動を行うとき、男女とも多くの人が感謝、好感、なじみ、気安さなどを感じている。また異性の人に依存的行動をするときは男女とも愛情を感じている人が多い。また女子が依存的行動をするときは男子よりも安心感を感じている人が多い（ $\chi^2=4.59$, $df=1$, $p<.05$ ）。男子が女子に依存的行動を行うときは恥ずかしさを感じている人が少なくない。男女とも異性に依存的行動をするときは同性に比べて甘えを感じる人が多い。

一方、嫌いな人に依存的行動を行うときは、多くの人が屈辱感やくやしさ、嫌悪感を感じている。

(3) 服従的行動を行うときの情緒：服従的行動を行うときは、明確な性差がみられ、男女により、また相手の人の性別により感じる情緒がかなり異なっている。男子は相手に好意をもっている場合でも、服従的行動を行うときは屈辱感をもち（男女間 $\chi^2=6.24$, $df=1$, $p<.02$ ）、不満を感じている（男女間 $\chi^2=7.94$, $df=1$, $p<.01$ ）人が少なくない。この結果から、男子は服従的行動を行う場合、大きな心理的抵抗や負担を感じていることが分かる。逆に女子は好意をもっている人に服従的行動を行うときは多くの人が敬意を感じ、特に相手が男性のときは好感や愛情（男女間 $\chi^2=5.45$, $df=1$, $p<.02$ ）を感じながら行う人が多い。女子の場合、好意をもっている人に対する服従的行動はポジティブな行動と考えることができる。

一方、嫌いな人に服従的行動を行う場合、ほとんどの人が嫌悪感や屈辱感を感じている。嫌いな人に対する情緒には性差は少ないが、男子の半数が劣等感を感じている点が目につく（男女間 $\chi^2=4.59$, $df=1$, $p<.05$ ）。

(4) 回避的行動を行うときの情緒：好意をもってい

Table 1

好意および嫌悪の対人感情をもっている人に異なった対人行動を行うとき感じる主要情緒の生起予想の比率
(数値は%)

1. 男子 (N=30)		友好的行動		依存的行動		服従的行動		回避的行動		拒否的行動		攻撃的行動		支配的行動		援助的行動	
対人感情	性別	同性	異性	同性	異性	同性	異性	同性	異性	同性	異性	同性	異性	同性	異性	同性	異性
a 喜び	63.33	73.33	20.00	23.33	10.00	10.00	0	0	0	0	0	0	0	13.33	20.00	36.67	46.67
b 驚き	0	0	0	0	0	0	0	0	3.33	3.33	3.33	10.00	10.00	0	0	0	0
c 恐怖	0	0	0	0	0	0	0	10.00	10.00	3.33	3.33	13.33	13.33	3.33	3.33	0	0
d 悲しみ	0	0	3.33	0	13.33	13.33	30.00	36.67	20.00	26.67	16.67	20.00	20.00	3.33	3.33	0	0
e 怒り	0	0	3.33	0	26.67	20.00	23.33	26.67	40.00	33.33	46.67	46.67	46.67	3.33	3.33	0	0
f 嫌悪	0	0	3.33	3.33	30.00	23.33	30.00	30.00	40.00	36.67	43.33	40.00	40.00	6.67	6.67	0	0
g 軽蔑	0	0	0	0	6.67	6.67	16.67	16.67	30.00	30.00	23.33	20.00	20.00	6.67	6.67	0	0
a 喜び	0	0	0	0	0	0	10.00	10.00	10.00	10.00	23.33	26.67	26.67	30.00	26.67	3.33	3.33
b 驚き	10.00	10.00	6.67	6.67	6.67	6.67	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6.67	6.67
c 恐怖	13.33	6.67	16.67	16.67	13.33	10.00	3.33	3.33	10.00	10.00	6.67	3.33	3.33	3.33	3.33	3.33	3.33
d 悲しみ	13.33	13.33	13.33	13.33	20.00	20.00	3.33	3.33	3.33	3.33	3.33	3.33	3.33	3.33	3.33	13.33	13.33
e 怒り	16.67	16.67	16.67	16.67	63.33	63.33	33.33	30.00	50.00	50.00	80.00	80.00	80.00	20.00	16.67	6.67	6.67
f 嫌悪	60.00	56.67	60.00	60.00	86.67	83.33	70.00	73.33	56.67	56.67	70.00	70.00	70.00	50.00	50.00	43.33	43.33
g 軽蔑	36.67	36.67	26.67	23.33	40.00	41.00	56.67	56.67	50.00	50.00	60.00	60.00	60.00	46.67	45.67	36.67	36.67
2. 女子 (N=30)		友好的行動		依存的行動		服従的行動		回避的行動		拒否的行動		攻撃的行動		支配的行動		援助的行動	
対人感情	性別	同性	異性	同性	異性	同性	異性	同性	異性	同性	異性	同性	異性	同性	異性	同性	異性
a 喜び	83.33	83.33	20.00	20.00	13.33	20.00	0	0	0	0	0	0	0	13.33	10.00	70.00	70.00
b 驚き	0	0	0	0	0	0	13.33	13.33	16.67	16.67	16.67	16.67	16.67	3.33	3.33	0	0
c 恐怖	0	0	0	0	3.33	3.33	10.00	10.00	16.67	16.67	16.67	16.67	16.67	3.33	3.33	0	0
d 悲しみ	0	0	6.67	3.33	6.67	6.67	50.00	53.33	46.67	46.67	30.00	30.00	30.00	6.67	6.67	0	0
e 怒り	0	0	0	0	6.67	3.33	10.00	10.00	20.00	20.00	40.00	40.00	40.00	3.33	3.33	0	0
f 嫌悪	0	0	0	0	3.33	3.33	30.00	26.67	33.33	33.33	30.00	30.00	30.00	3.33	3.33	0	0
g 軽蔑	3.33	0	3.33	3.33	6.67	3.33	16.67	16.67	26.67	26.67	16.67	16.67	16.67	0	0	3.33	3.33
a 喜び	3.33	3.33	3.33	3.33	0	0	10.00	10.00	10.00	10.00	10.00	10.00	10.00	23.33	23.33	20.00	20.00
b 驚き	13.33	13.33	13.33	13.33	6.67	6.67	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10.00	10.00
c 恐怖	3.33	3.33	3.33	3.33	6.67	6.67	10.00	10.00	3.33	3.33	0	0	0	3.33	3.33	3.33	3.33
d 悲しみ	0	0	6.67	6.67	23.33	23.33	3.33	3.33	3.33	3.33	3.33	3.33	3.33	0	0	0	0
e 怒り	13.33	13.33	6.67	6.67	56.67	56.67	3.33	3.33	26.67	26.67	66.67	66.67	66.67	6.67	6.67	3.33	3.33
f 嫌悪	66.67	66.67	53.33	53.33	80.00	80.00	73.33	73.33	73.33	76.67	76.67	76.67	76.67	50.00	53.33	53.33	53.33
g 軽蔑	13.33	16.67	10.00	10.00	10.00	6.67	16.67	23.33	26.67	26.67	33.33	33.33	33.33	30.00	33.33	23.33	23.33

る人に対して回避的行動を行う場合、多くの人が気がねや π びし π を感じ、悲しみや不安、苦しみを感じる人も少なくない。

一方、嫌いな人に回避的行動を行う場合は、多くの

が嫌悪感やけむたさを感じている。また男子は軽蔑を感じた場合、回避的行動をとるという人も少なくない(男女間 $\chi^2=10.33$, $df=1$, $p<.01$)。

(5) 拒否的行動を行うときの情緒：好意をもってい

る人に拒否的行動を行うとき感じる情緒は、回避的行動を行うときとはほぼ同様の傾向を示している。また女子は男子に比べて拒否的行動を行うことに不安が伴っている。

一方、嫌いな人に拒否的な行動を行うときは、多くの人が嫌悪感を感じている。また軽蔑感、憎悪感、怒りなどの情緒をもつ人が少なくない。

(6) 攻撃的行動を行うときの情緒：好意をもっている人に攻撃的行動を行うのは、イライラ感じたり、不安、怒りの気持をもったときである。

一方、嫌いな人に攻撃的行動を行うときは、ほとんどの人が怒りを感じ、多くの人が嫌悪感と憎悪感を感じている。また多くの男子は軽蔑感をもっている(男女間 $\chi^2=4.29$, $df=1$, $p<.05$)。

(7) 支配的行動を行うときの情緒：好意をもっている人に支配的行動を行うときは好感や優越感をもつ人が少なくない。また気がねを感じる人もいる。男子は女子に支配的行動を行うとき、愛情やかわいらしさ(男女間 $\chi^2=6.94$, $df=1$, $p<.01$)を感じている。

一方、嫌いな人に支配的行動を行うときは優越感、嫌悪感を感じている人が少なくない。男子の場合、軽蔑感をもっている人も少なくない。

(8) 援助的行動を行うときの情緒：好意をもっている人に援助的行動を行うとき、ほとんどの人が好感を感じ、多くの人が喜びやなじみ、うれしさを感じる。また優越感や気安さを感じる人も少なくない。性別では男子は好きな女子に対して援助的行動を行うときに、愛情やかわいらしさを感じることが多く、女子は相手の性別にかかわらず愛情やかわいらしさを感じる。

一方、嫌いな人に援助的行動を行うとき、優越感をもつ人もいるが、嫌悪感や特に女子はイライラや不満をもちながら援助的行動をしている人が少なくない。

2. 結果の概括

対人感情と対人行動との関連から、情緒生起について大枠を知るために、ここで、各々をポジティブとネガティブに大別して、調査結果をまとめてみることにする。

対人感情については、本稿では好悪の感情傾向のみを分析したので、相手に対する好意の感情傾向をポジティブな感情傾向、嫌悪の感情傾向をネガティブな感情傾向とする。

対人行動については、相手に行う対人行動を分析しているので、援助的行動、友好的行動、依存的行動、支配的行動をポジティブな行動とし、回避的行動、拒否的行動、攻撃的行動をネガティブな行動とする。

情緒については、齊藤(1985)と同一である。

このような大枠の分類により、上記結果を概括する

と次のようになる。

(1) ポジティブな対人感情をもっている人に、ポジティブな行動を行う場合、人は好感等ポジティブな情緒を感じやすい。

(2) ポジティブな対人感情をもっている人に、ネガティブな行動を行う場合、人は寂しさや悲しみ、また不安のような内に向かうネガティブな情緒を感じやすい。

(3) ネガティブな対人感情をもっている人に、ポジティブな行動を行う場合、人は嫌悪感等ネガティブな情緒を感じやすい。

(4) ネガティブな対人感情をもっている人に、ネガティブな行動を行う場合、人は嫌悪感、怒り、軽蔑感など外に向かうネガティブな情緒を感じやすい。

対人感情と情緒と対人行動の関連は以上のように要約される。しかし、これはあくまで概略で、正確には結果と考察の1.で分析したように、対人場面において感じる情緒は各状況状況により異なり、数個にグルーピングすることはむしろ難しいといえよう。各対人感情と各状況により異なった情緒が感じられるのである。当然のことであるが、それが人の感じる情緒の複雑さであり、豊富さである。それ故、Kemper(1978)や齊藤(1985)の論及の如く、対人感情や情緒の社会心理学的研究は、状況との関連を詳細に検討していくというアプローチが重要であるといえ、ここでの結果の多様性はその考えを支持しているといえよう。

引用文献

- Arnold, M. B. 1960 *Emotion and personality*. New York: Columbia University Press.
 Ekman, P. (Ed.) 1982 *Emotion in the human face*. New York: Cambridge University Press.
 Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*. New York: John Wiley & Sons.
 Kemper, T. D. 1978 *A social interactional theory of emotions*. New York: John Wiley & Sons.
 McDougall, W. 1908 *Introduction to social psychology*. London: Methuen.
 齊藤 勇 1985 対人感情と情緒の人間関係的アプローチ 心理学研究, 56, 222-228.
 Schachter, S. 1964 The interaction of cognitive and psychological determinants of emotional state. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 1. New York: Academic Press. Pp. 49-80.

—1985. 7. 31. 受稿, 1986. 5. 10. 受理—